因果関係を表すダケニとダケアッテ

言語学・応用言語学専門分野
2013 年（平成 25 年)入学
1LT13027M
内山将勝
2017 年（平成 29 年）1 月提出

要旨

接続形式ダケニとダケアッテは交換できる場合と交換できない場合がある。本論文では、「P ダケニ Q」とした場合には、「P であるならば当然 Q」という解釈を示す用法に加えて、「P でなければ Q ではない」という因果関係を表す用法があるのに対し、「P ダケアッテ Q」とした場合には、「P であるならば当然 Q」という解釈だけを示すと主張する。だからこそ、接続形式ダケニが「P でなければ Q ではない」という因果関係を表す場合には、ダケアッテと置き換えられないのである。

目次

1. 問題提起 **1**

2. ダケニとダケアッテの分析 **2**

2.1. ダケアッテ構文 **2**

2.2. ダケニ構文 **3**

3. ダケニとダケアッテの違い **5**

4. 先行研究 **6**

4.1. 益岡**(2011)** **6**

4.2. 橋本**(2013)** **6**

5. オカゲデ、セイデ、バカリニと「**P** でなければ **Q** ではない」 **9**

6. まとめ **10**

1. 問題提起

日本語には(1)のように文の前後をつなぐ接続形式として、ダケニがある。

(1) a. 大都会｛だけに｝賑わいがある。
b. 長年主将を務めている｛だけに｝責任感が強い。

(1a)は、「大都会であるので賑わいがある」という意味である。(1b)は、「長年主将を務めているので責任感が強い」という意味である。どちらの例文においても、ダケニが文の前後の関係をつなぐ役割を果たしている。ここで、(2)のようにダケニを接続形式ダケアッテと交換させた構文を作ってみる。

(2) a. 大都会｛だけあって｝賑わいがある。
b. 長年主将を務めている｛だけあって｝責任感が強い。

(2)のように、ダケニをダケアッテと交換させた場合でも、文章全体としての意味は変わらない。しかし、橋本(2013)が示した以下のような構文では、ダケニとダケアッテを交換した場合にダケアッテ構文では容認性が下がる。

(3) a. 前評判がいい映画｛だけに｝つまらなくて拍子抜けした。
b. 前評判がいい映画｛*だけあって｝つまらなくて拍子抜けした。 [橋本 2013: 2,(5)]

(3a)は、「前評判がいい映画だったのでつまらなくて拍子抜けした」という解釈である。この場合ダケニをダケアッテと交換すると、(3b)のように文として容認できなくなる。

以上のようにダケニとダケアッテが交換可能である構文と交換できない構文がある。よって本論文では次のような問いに対する考察を行う。

(4) 接続形式ダケニとダケアッテは一見交換可能であるが、どのような場合に交換できないのか。

(4)について考察するために、本論文では接続形式ダケニ、ダケアッテの構文を分析しそれぞれが持つ用法を明らかにする。

2. ダケニとダケアッテの分析

2.1. ダケアッテ構文

ダケニとダケアッテについて考察する際、ダケアッテから先に考察するほうが本論文全体として理解しやすいと考えたため、まずダケアッテ構文を取り上げる。接続形式ダケアッテは(5)のような構文に用いられている。

(5) a. さすが会津の名山と伝えられた｛だけあって｝、立派で美しい。 [深田久弥 「日本百名山」]
b. バスケットボール選手｛だけあって｝背が高い。
c. ミシガン大学は、自らを中西部のハーバードと称する｛だけあって｝、優秀な教授陣と学生を全米に誇っている。 [益岡 2011:6,(27)]
d. 小説家になりたいという｛だけあって｝、本の話が好きだった。 [藤田宣永 「愛さずにはいられない」]
e. 社長が重用する｛だけあって｝、大した男よ。 [菊地秀行 「妖魔淫殿」]

(5a)の例文では、「会津の名山と伝えられた」という事態と、その事態から当然期待される性質である「立派で美しい」という内容がダケアッテによって結び付けられている。この場合、「会津の名山と伝えられたので立派で美しい」というように前件が後件を引き起こす因果関係として解釈するというよりむしろ、「会津の名山と伝えられた」という内容に当然含まれていることが期待される「立派で美しい」という内容が接続していると考えられる。同様に(5b)の場合も「バスケットボール選手」という内容が「背が高い」ということを引き起こしたという因果関係というよりもむしろ、「バスケットボール選手」という内容と「バスケットボール選手」ならば当然期待される「背が高い」という内容がダケアッテによって接続されていると考えられる。つまり「P ダケアッテ Q」という形式の場合、「P であるならば当然期待される Q」という解釈になる。

また、「P ダケアッテ Q」という構文中のダケアッテは(6)のようにダケニと置き換えても容認性は変わらない。

(6) a. さすが会津の名山と伝えられた｛だけに｝、立派で美しい。
b. ミシガン大学は、自らを中西部のハーバードと称する｛だけに｝、優秀な教授陣と学生を全米に誇っている。
c. 小説家になりたいという｛だけに｝、本の話が好きだった。
d. 社長が重用する｛だけに｝大した男よ。

(6)で示したように接続形式ダケアッテはダケニに置き換え可能である。全てのダケアッテ構文はダケニに置き換えられるが、ダケニとダケアッテには交換できない場合があるということから、接続形式ダケアッテはダケニの部分集合として存在していると考えられる。

2.2. ダケニ構文

次にダケニ構文について考察する。ダケニ構文には大きく二つの用法があると考えられる。初めに一つ目の用法について考察する。

(7) a. 住み慣れたマンション｛だけに｝居心地がいい。
b. バレーボール選手｛だけに｝背が高い。 [橋本　2013:3,(9a)]

(7a)の例文は、「住み慣れたマンション」と「居心地がいい」という内容がダケニによって結びつけられている。この場合「P ダケニ Q」は「P であるならば当然期待される性質 Q」という関係性を表しているといえる。つまり、「住み慣れたマンション」であるということから当然含まれていると期待できる「居心地がいい」という内容が後続している。同様に(7b)では、「バレーボール選手」ということから当然期待される「背が高い」という内容が後続している。この点、2.1 でみた接続形式ダケアッテと同じ用法であるといえる。以下のように(7)のダケニをダケアッテに置き換えても容認性は変わらない。

(8) a. 住み慣れたマンション｛だけあって｝居心地がいい。
b. バレーボール選手｛だけあって｝背が高い。 [橋本　2013:3,(9b)]

次に(7)とは異なるダケニの用法について、例文を示す。

(9) a. ソ連は中国に先を越されたことに大きな焦りを感じていた｛だけに｝、米ソ首脳会談開催の話はトントン拍子で進んだ。 [森本良男　「冷戦・人と事件」]
b. 講義はちんぷ平凡に思われ、物理学というものに大きな憧れを感じていた｛だけに｝それは大変な幻滅であった。（朝永振一郎「科学者の自由な学園」） [益岡 2011,4:(15)]
c. 厳しい残暑｛だけに｝、一度退いた選手の再出場も可能な特別ルールで実施した。 [産業新聞経済社　「産経新聞」]
d. 人工（artificial）の産物である｛だけに｝、人間の知恵や能力の限界から逃れることはできない。 [寺東寛治　「時間と空間の戦略」]

(9)の例文では、「P ダケニ Q」とした場合 P と Q は因果関係にあり、Q の成立に P は欠か

せない条件となっている。例えば(9a)の場合、「ソ連が中国に先を越されたことに大きな焦りを感じていた」ことが原因で、「米ソ首脳会談開催の話がトントン拍子に進んだ」という事態が引き起こされていることになる。同様に(9b)の場合、「講義はちんぷ平凡に思われ、物理学というものに大きな憧れを感じていた」ことが原因で「大変な幻滅であった」という事態が引き起こされている。この用法でダケニが用いられる場合、「P ダケニ Q」の構文は「P でなければ Q ではない」という関係性を表しており、言い換え可能である。

(10) a. ソ連が中国に先を越されたことに大きな焦りを感じていなければ、米ソ首脳会談開催の話はトントン拍子に進んでいなかった。
b. 講義はちんぷ平凡に思われ、物理学というものに大きな憧れを感じていなければ、それは大変な幻滅ではなかった。
c. 厳しい残暑でなければ、一度退いた選手の再出場も可能な特別ルールで実施しなかった。
d. 人工（artificial）の産物でなければ、人間の知恵や能力の限界から逃れることができない訳ではない。

これは、「P ダケニ Q」が「P によって引き起こされた Q」という因果関係を表しているからだと考えられる。(9)の例文のように、「P ダケニ Q」が「P でなければ Q ではない」という関係性を表している場合、以下(11)のようにダケニをダケアッテに交換すると容認性が下がる。

(11) a. ソ連は中国に先を越されたことに大きな焦りを感じていた｛*だけあって｝、米ソ首脳会談開催の話はトントン拍子で進んだ。
b. 講義はちんぷ平凡に思われ、物理学というものに大きな憧れを感じていた｛*だけあって｝それは大変な幻滅であった。
c. 厳しい残暑｛*だけあって｝、一度退いた選手の再出場も可能な特別ルールで実施した。
d. 人工（artificial）の産物である｛*だけあって｝、人間の知恵や能力の限界から逃れることはできない。

以上から、「P ダケニ Q」が「P でなければ Q ではない」という関係性を表す場合、ダケニはダケアッテとは交換できず、これはダケニのみがもつ特有の用法であると言える。

3. ダケニとダケアッテの違い

ここで、接続形式ダケニとダケアッテの特性について分析する。

(12)ダケニ

a. 「P ダケニ Q」とした場合、「P であるならば当然期待される Q」と解釈される。

b. 「P ダケニ Q」とした場合、「P でなければ Q ではない」という関係性を表す。

(13)ダケアッテ

「P ダケアッテ Q」とした場合、「P であるならば当然期待される Q」と解釈される。

接続形式ダケニとダケアッテにおいてダケニ構文は(12)ように二つの解釈を示す。それに対しダケアッテ構文は(13)のように一つの用法で用いられ、(12a)と同様の解釈になる。

ここで、本論文の問題提起にある、ダケニとダケアッテが交換できないのはどういう場合かという問いに対して、次のように結論付けた。

(14) 「P ダケアッテ Q」という構文のダケアッテは全てダケニと交換可能である。一方、「P ダケニ Q」という構文において「P でなければ Q ではない」という関係性を表す場合、ダケニはダケアッテと交換できない。

ダケニ構文には二つの用法があり、一つは(12a)のようにダケアッテ構文と同様の用法で、もう一方は(12b)で示したダケニ構文特有の用法である。ダケニとダケアッテが交換できない場合が存在するのは、ダケニ構文特有の用法があるためであると考える。

4. 先行研究

4.1. 益岡(2011)

益岡(2011)は、日本語の接続形式の多様性に着目し、共通の要素を基に複数の接続形式が枝分かれのように増加していく「接続形式の分化」という現象について考察した。その一つの例として「ダケニ」という接続形式から「ダケアッテ」が分化したとする。

はじめにダケニ構文の特徴を以下の例文から二つ示した。

(15) 原因がまるでわからないだけに、僕としてはひどくつらかった。（村上春樹　「村上朝日堂はいかにして鍛えられたか」） [益岡　2011:4,(13)]

(16) さすがに郷土史をやってらっしゃるだけに詳しいですね。（松本清張「陸行水行」） [益岡　2011:5,(21)]

(15)の例文からわかることは、ダケニが前件と後件の比例関係を表すということである。「原因がわからない」というスケール性に対応するように「つらさ」のスケールが比例して示されている。次に、(16)からは、評価を表す用法が読み取れるとする。ダケニ構文では、事態のスケール性を単に叙述するだけでなくスケール測定を行う場合がある。(16)の場合、郷土史をやっていてこの地域に詳しいという事態が話し手によって積極的に評価されていると考える。この場合、評価を表す「さすがに」を挿入することができると述べている。

ダケアッテ構文では、ダケニ構文と同じく、事態のスケール性に基づく比例関係があるという特徴がある。そして、ダケアッテ構文ではその当該事態を積極的に評価す特徴があるとする。つまり、(16)のように説教的な評価として用いられるダケニの場合、ダケアッテと置き換えられると考えた。しかし、ダケニとダケアッテが置き換え可能である場合の「積極的な評価」という基準が解釈の裁量が広く明確ではないように思う。また、(16)は積極的な評価というよりも、「郷土史をやっている」ということから「詳しい」ことが当然期待されている内容になっていると考えられる。つまり、３章でみた「P であるならば当然期待される Q」という解釈になっているといえる。

4.2. 橋本(2013)

橋本(2013)は以下のような例文における容認性の比較からダケニとダケアッテの構造の違いを主張した。

(17) a. [$_{XP1}$ 前評判がいい映画]**だけに**[$_{XP3}$ おもしろい]。

b. [$_{XP1}$ 前評判がいい映画]**だけあって**[$_{XP2}$ おもしろい]。 [橋本　2013: 2,(3)]

(18) a. *[$_{XP1}$ 前評判がいい映画]**だけに**[$_{XP3}$ つまらない]。

b. *[$_{XP1}$ 前評判がいい映画]**だけあって**[$_{XP2}$ つまらない]。 [橋本 2013: 3,(11)]

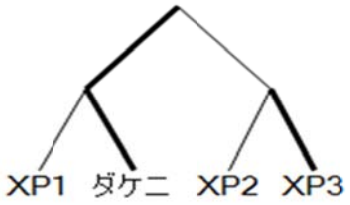
(19) a. [$_{XP1}$ 前評判がいい映画]**だけに**[$_{XP2}$ つまらなくて][$_{XP3}$ 拍子抜けした]。

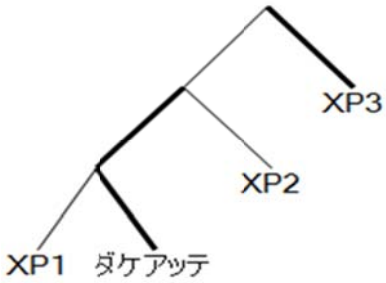
b. *[$_{XP1}$ 前評判がいい映画]**だけあって**[$_{XP2}$ つまらなくて][$_{XP3}$ 拍子抜けした]。

[橋本 2013:2,(5)]

(17)ではダケニとダケアッテの前後で原因と結果という因果関係を示しており、ダケニとダケアッテは交換可能である。(18)の構文においては「前評判がいい映画」という原因に対して「つまらない」という結果は導かれないため前後の関係が成り立たず(18a)、(18b)ともに容認できない。しかし、ダケニの場合(19a)のように「つまらない」に「拍子抜けした」という主観的述語が付与された構文では容認できるようになる。つまり、「前評判がいい映画」という原因から当然帰結しない結果である「つまらない」が後続したとしてもXP3が後続して「つまらなくて拍子抜けした。」という構文であれば容認される。一方ダケアッテに関しては、ダケアッテの直後の内容が当然帰結する結果でなければ容認されない。このような違いからダケニとダケアッテの構造の違いを以のように示した。

(20) a. ダケニが作る構造 b. ダケアッテが作る構造





ダケニの場合(20a)のように最初にmergeするものを原因として解釈し、次にmargeするものを結果として解釈するという構造をとる。そしてダケアッテの場合、(20b)のように最初にmergeするものを原因として解釈し、次にmergeするものを当然帰結する結果として解釈するとした。つまり、ダケニとダケアッテでは第二項に与える意味役割が違うために(19)のような構文の場合に容認性に違いがでるとした。

橋本(2013)はダケニとダケアッテが交換できない原因をそれぞれが与える構造の違いから説明した。しかし、ダケニしか容認できない(19)も本論文の主張のように「P ダケニ Q」という構文だけが「P でなければ Q ではない」という関係性を表すことができることを考えれば当然である。

(21)　　前評判がいい映画でなければつまらなくて拍子抜けしなかった。

よって、ダケニとダケアッテを交換した場合に容認性に違いが出るのは、文構造の違いというより、ダケニとダケアッテでは表すことのできる前後の関係性に違いがあることが原因だと言える。つまり(19)では、文の前後の関係性がダケニ構文でしか表すことができない「P でなければ Q ではない」という内容になっていたために、交換できなかったと考える。

5. オカゲデ、セイデ、バカリニと「P でなければ Q ではない」

ダケニ構文が「P でなければ Q ではない」という関係性を表すことはこれまでの章でみてきた。本論文以前に、木下(2000)は接続形式タメニが「P でなければ Q ではない」という「必要条件」を満たす際に用いられることを述べている。木下(2000)は「原因・理由」を表すタメニの特徴について、同じく「原因・理由」を表すカラと比較することによって考察した。

(22)　強い風が吹いたタメニ／カラ旗が倒れた。　[木下　2000: 26,(4)]

(22)のように原因・理由を表す場合、タメニとカラは交換可能である場合がある。しかし、次のような例もみられる。

(23)　200 円のものを買って 500 円払ったカラ、おつりは 300 円だった。 [木下　2000: 26,(7)]

(24)　??200 円のものを買って 500 円払ったタメニ、おつりは 300 円だった。　[木下 2000: 26,(8)]

上記の例から、カラとタメニの容認性の違いを、P（原因）カラ／タメニ Q（結果）における P と Q の因果関係から説明した。具体的には、P が Q のその場合その状況における「必要条件」である場合にはタメニによって因果関係を示すことができるということである。つまり「P でなければ Q ではない」という関係が成り立つ場合を、タメニが示すことができる因果関係であるとした。そうすると、(22)、(23)の例文は以下のようになる。

(25)　強い風が吹かなければ旗は倒れなかった。　[木下　2000: 27,(15)]

(26)　??200 円のものを買って 500 円払わなければおつりは 300 円ではなかった。 [木下 2000: 27,(16)]

(26)のようにタメニでは容認できなかった因果関係は非文となるためタメニで表すことができる因果関係は「P は Q の必要条件であること」だとした。

本論文の作成にあたって、その他の接続形式である、オカゲデ、セイデ、バカリニについても「P でなければ Q ではない」という関係性を表すことができるのか考察したが、どの接続形式でも表せないと考えた。これらの接続形式を用いた文の前後の関係性に関する考察は今後の課題としたい。

6. まとめ

本論文では、ダケニとダケアッテがどういう場合に交換できないのかという問いに対して考察を行った。まず、ダケニとダケアッテについて、以下のような性質があると考えた。

(27)ダケニ

a. 「P ダケニ Q」とした場合、「P であるならば当然期待される Q」と解釈される。

b. 「P ダケニ Q」とした場合、「P でなければ Q ではない」という関係性を表す。

(28)ダケアッテ

「P ダケアッテ Q」とした場合、「P であるならば当然期待される Q」と解釈される。

そして、ダケニとダケアッテがどのような場合に交換できないのかという問いに対して、次のように結論付けた。

(29) 「P ダケアッテ Q」という構文のダケアッテは全てダケニと交換可能である。一方、「P ダケニ Q」という構文において「P でなければ Q ではない」という関係性を表す場合、ダケニはダケアッテと交換できない。

参照文献

前田直子 (2009) 『日本語の複文ー条件文と原因・理由文の記述的研』 くろしお出版

橋本萌子 (2013) 『ダケニとダケアッテの解釈と構造』 九州大学卒業論文

益岡隆志 (2011) 「原因理由を表すダケニとダケアッテの分化」 『日本語・日本学研究』 東京外国語大学国際日本研究センター 1:1-12

木下りか (2000) 「因果関係と接続形式　タメニとカラ」 日本語教育研究集会予稿集 26-29

三浦祐子 (2007) 「複文における複合接続助詞の機能ー「せいで」・「おかげで」について」 言語科学論集第 11 号 35-46

境希里子 (2014) 「「おかげで」と「せい」につて : 用例分析を中心に」 文化学園大学紀要、人文・社会科学研究 69-82

謝辞

本論文の作成にあたり、主査教官である上山あゆみ先生には論文作成の最後まで丁寧なご指導をいただきました。また、副査教官である久保智之先生、下地理則先生、太田真理先生にも大変お世話になりました。感謝申し上げます。